

佐伯史談

第五十五号

「郷土史研究」誌
通算第七十七号

昭和四十四年八月廿九日

佐伯史談会

発行所 大分県佐伯市大字鶴垣宮龍護寺 羽柴方

研究

水ノ子島灯台

高野 喜助

(本会顧問・佐伯市協定)

大分県と四国を分ける豊後水道のまんなか、水ノ子
灯台がある。海面に顔さのぞかせたような、小さな岩の
上に、赤と白のだんだんがらじまに塗り分けられた高さ六十
メートルの灯台が立っている。遠くから見ると、まるで
水の中から生まれ出たようだ。まさに「水ノ子灯台」で
ある。

豊後水道は、瀬戸内海の玄関である。瀬戸内海沿岸の
港へ出入りする船はここを通る。二十数年前には、日本
が世界に誇る巨大戦艦、武蔵、大和を中心とした艦隊が
渡をけをていていたものである。水ノ子灯台は、この幾
星霜の移変わりを経て、百年に近い年月の間、見つめてきた
以上は大分合同新聞さんのものを拝借した。
さて灯台の出生は、明治三十四年三月起工全三十七年
三月竣工、実に三年の長き歳月と十七万四千二百五十

の経費とを要した難産な艱難事業であつたという。
時分りもへ明治三十七年、仏国リヨン市に於いて開催
中の万国博覧会に、この灯台の模型を出品したというこ
とである。

この灯台により幾多船舶航海等に福音をもたらし、
交通運輸上貢献する地計り知らずのことには大なるよみが
ある、といえるであらう。

とこんで近頃又一
つ大きな佳勢といわ
うか新しい使命がか
けらるるようになった。
それは、国民保
健問題として重要課
題ともいふべき、日
本脳脊対策問題につ
いて渡鳥によるビー
ルス調査のことであ
る。

そもそも、水ノ子
灯台が出来てから、
遠く、オーストラリ
ア、ニュージーニア、

本号内容

- 水ノ子島灯台(高野喜助)……………一
- 再物故会員を追悼す(羽柴弘)四
- 資料 米一俵の価格(平田幸市)上
- 磯野忠魂碑(山本保)……………七
- 記録 石神峠を往く(高木嘉吉)二
- 研究 佐伯の港はどんな働きをして
いるか(田島浩)……………三
- 記録 瀬戸内から北川へ……………六
- (文)羽柴弘
(書)吉岡雅雄
- 読物 榊原礼城物語(高橋智)……………九
- 集会予告、賛助寄付料受
会費消息、正誤など……………三

フリーピン、中国南部、台湾など南の国から、幾千キロの長い旅路をこえて、小さな渡り鳥たちが、目ざす日本の休養所でもある、がなかに過つて灯台にぶつかり、傷いたり死んだり、正に渡り鳥にとつては悲劇の場でもある。全く悲喜交の場裡である。

さてなに故にこの渡り鳥たちが日本岬尖対策に一役買われたのであろうか。それは、日本岬尖が夏になると流行するが、冬の間はこのビールス及び日本国内になんていれるのかそれとも春やつて来る渡り鳥たちによつて持込まれるのではないか、という説が持ち上り、そこでこの渡り鳥説を裏付けるためこの水ノ子灯台で国立豫防衛生研究所ビールス第四室長始め関係係員によりてすでに四回におたり調査されたという。

こうすると、航路者安全の守りに止まらず、全人類健康のために、尽すべき大なるものがある様思われ、まことに欣快を催す、といひ度くなる。

次に水ノ子灯台に關する記録を見てみよう。

「水ノ子島灯台（豊後国南海部郡東中浦村大字梶寄浦）
（本記に記す事項記には行政區画は大字太島字水ノ子島ニおれり
番とあり）

水ノ子島灯台は豊後水道の中央に兀立する孤島なり。其近傍暗礁起伏し其中欲り水ノ子島最高く干潮に約九十天とす。故に此水道を通過する船舶に對する自ら好目標なりと雖も、暗夜には坐礁の慮をいとせず。因て明治三十四年灯台建設の計劃成りたるも其工事極めて困難なるを以て、首めに材料運搬引船用として長さ六十尺幅十尺の小蘆流船を新造し、又吏員退息所の位置は本島の西南約六哩を距る豊後國梶寄浦と適當と定め、此処に建設事

務所を設立し、次いで水ノ子島の頂上を削夷し、自基礎至頂上高百三十七尺基址四徑廿六呎の灯塔を建設し、荷揚道路を開鑿し、塔下別に炊事場及貯油室（折行三十五尺深行二十尺）を建て、塔下には貯水場を設け上部に当直室、寢室、貯油室杯を設け、其上に灯籠を置き其内に二等二面等距反折器を据へ、石油蒸流自熱灯を点し水銀槽を泛べ機械を以て運轉し、世秒時に一閃を發せしむ。從來離島灯台と陸地の通信は手球を用ひたるが、本島灯台には始めて反折信号器（ヘリオスツット）を用ひ、之を灯台第三層の窗外及陸地退息官舎の双方に備へ、昼間は日光、夜間は灯火を用ひて信号せしむ。蓋し本島は筑前島帽子島に比すれば陸地との距離稍遠きも、其頂上の面積及更に狹隘にして僅かに灯台の位置を入れるに過ぎず。香子島中在勤の困難は島帽子島に比し優るとも劣るべからず。其建設費算は十萬四千二百五十圓にして、四ヶ年継続の工事とす。灯台建設以来の巨額なり。

明治三十四年三月起工、全三十七年三月を以て竣工と告げ点灯す。

因に記す。仏國リヨン市に開催の國博覽會に、水ノ子島灯台模型を出品す。

（明治三十七年）

要項

水ノ子島灯台要項記

面積

一〇一三坪（地盤一七二六八を以て大分県より受

行政區劃

東中浦村大字太島字水ノ子島ニおれり（領

位置

所在地 豊後水道中央水ノ子島

北緯

三三度三分

東經

一三二度一〇分

初灯年月

明治三十七年三月二十日

塗色及構造

黑白横線、円形、石造

等級及灯質 第壹等、閃白光、毎三十秒に一閃光

灯高 基礎上 三六米四（一・二〇・尺）
宇内水面上 八六米三（一・八二・尺）

燭光 六八八、〇〇〇燭光

光達距離 二〇哩

灯器 種類 一三〇の燭光、N式自熱灯

回機機械の種類及特許時間 水銀、八時間

消火のより官舎迄 三三・二七（灯台官舎又は東浦堤防橋寄りより）

通深距離 十三丁（官舎より機寄り橋寄り小島坂まで）

灯台員数 四名

附記 エキナ算一七四、二五〇円なりしも完工迄には約二十万圓を要したという。

古記録により見逃してはならないことは、灯台の名称である。今では水ノ子灯台と呼んでゐるが、灯台設置當時には島があり「水ノ子島灯台」と呼んでゐたのである。夫れが何時の間に於て失われ水ノ子灯台と呼ばれるようになった。全くうそから出たまこととはこんなことをいふのであらうか。水ノ子島や灯台が泣いてゐるせぬかと、同情する催す。

大正十三年三月大分県主催九州沖渡八県聯（連）合共進会大分県協賛会共行大分県案内には「水ノ子島灯台」とあり、昭和十三年東洋行の絵葉書には、豊後水道水ノ子島の岩頭に立つ水ノ子灯台と、入念に豊後水道から書いてありながら灯台の名称には島が取り落されてゐる。思ふに大正末期から昭和初期の頃に島が紛失したやうである。何れもこのために灯台に変化を来さすわけではないからどうでもよいやうなもの、矢張り名称（固有名称）だけは正しく伝へて貰ひたいものである。

またこんな挿話（エピソード）がある。灯台建設計画當時主筆に於ては大分県所屬として取違へていた筈、突如彼嶺南側から水ノ子島は豊後県所屬であるから彼嶺南水ノ子島灯台とすべきだ」と横槍がは八つた。そこで大分県として、地元南海部郡としてしまつては置けぬ重大問題である。両県争奪戦が起つた。軍配は大分県に挙つた。その理由として次の二ツのことが挙げらる。その一つには東中浦村土地台帳に無人島水ノ子島として記録されてゐること、今一つは浦州浦地先から水ノ子島まで航いておる水ノ子島が海面上に露出してゐること、つまり浦出浦の地先であること、之は漁師連の証言に基くという。思ふに記録や実地体験の如何に貴重なるかを教えられるやうな思ひがする。

次に水ノ子島に關する文献二、三を掲げ結びとして置く。先ず豊後國志卷之五海部郡の条に、水ノ子島在大島東一相距四里許。自是西爲佐伯管内。水不東北有島、名曰日振。天慶中、藤原純友所據。相距大島一約十三里許。自是東北海上属豫州一云。

豊國小志第四十六章 島嶼及岬角 第二水ノ子島の条に、豊後水道中に嶺起せる一小島にして、伊豫の日振島と相對峙す。南海部郡大島浦を距る東五里許、藩封の當時は此島嶼を以て、豊後佐伯領と、豫州宇和島領との境界と劃したり。天慶中、藤原純友、此に據て事を謀ると云ふ。前年経費二十余万圓を以て、灯台を此島上に建設せしむ。

（註）本書は明治四十年十月大分県発行のものなるが、文中前年とは明治三十七年を指すものなるが、又序文そのまゝに豊後佐伯領及び一見水ノ子島に據つて事を謀りたるが如くなるも、豊後國志に云ふが如く日振島に據るものと思ふ。

大分県案内 第七章南海部郡の条に、水ノ子島灯台、

鹽水道の南口、洋々たる海上に浮ぶ孤島中、最南なる
 岩上と削りて築かれたるものなり。水面上十八丈二尺、
 石造白色横に黒線二条を描き、明光白色、毎十秒時間に
 一閃光を發する本邦有数の一等灯台にして、夜々鎮西の

瀧溪を守る航海者の指針なり。

(註) 毎十秒時間に一閃光とあるは三十秒の誤なり也。

(昭和四年、七、二二日記)

西物故会員を追弔す

一 青木 柴田 両会員の初盆にまいる

井 柴 弘 記

八月十四日午後、古江の故青木勝会員の
 初盆まいりに行く。高木会長、西野幹事、そ
 れに小澤校の同級生上杉会員、そして暇事秋一
 よに三照庵まで調査した故の四人。

「古江浦古老物語」といふ、幾層のエニフ
 な研究と「佐伯史談」誌上に決々と発表、別
 府の夜虎で藤原の身でありながら、極めて意
 欲的な研究と、調査と複床でつづけて、いれ
 ながら金快退院の望みも望しく今春一月歳
 勢急変逝去されたのであった。

手紙の上では頻りに交際をつづけていた私
 このことを全く知らず、一か月後までにおあて
 て弔問はしたものの、会としてはまだことに残念
 に思っていた。御老母及夫人に御挨拶の上私
 共は順々に靈前に香をたき、遺影を拝して
 その御冥福を祈った。

幸い初盆まいりに見えられた時千の石田氏
 も一しよにおきてなしてうけながら故人の追憶
 談を交わす。私は昨秋、青木氏から送つ
 て来た原稿——今へ遺稿となつた——を預つ
 ている。それと大宮八幡社の秋祭、俗に言う
 土下、の市の船踊ジョーヤラノを記憶である。

その原稿が私の手許に届いた時は時期はずれ
 であつたので、手許に保留してある次第、その五
 下、市も近い、来月手にはその遺稿を發表
 しようと思つてゐる。

夫人から柴田氏にまつてお墓にまいる。そし
 て三照庵にまゐり、私は故人と共に調査した古
 い塔など、その日のことを話ひつゝ歩いた。

次の日八月十五日は朝早くバスで、高木、羽
 柴上杉の三人が市井村宇津々にのほり、故柴田
 卓爾氏のお盆まいりをした。

今春四月十三日大分市の国分寺跡など諸と
 見送されて帰り、一日おいた十五日の急逝で、同
 い宇津々出身の羽柴さんこのことを知らず、会と
 しても不慮であつた。高木会長から必々と仲
 前に拝礼、御冥福を祈った。

故人は去年の夏の湯江行き、秋の神角寺行とこ
 の四月の大分行きに参加、小川の鮎子溪谷の探勝
 にも進んで余儀なくして出かけた（元禄木良
 中）止し、実は史談会の催しに赴いて後
 程に参加されていた。いつもにこやかに、まこと
 に好々爺の会員であつた。

特に国分寺跡でお孫の孝子えかどつた花
 急字真は思ひ出に新にする。（私はネガを
 お借りして帰り、五月の冬か会員に一枚かつ
 焼きまゝて配るようになっている、又昨年の夏の

蒲江行の際に柴田会員の行動を二枚とつてあ
 つたので、それは昨日使きつめて差し上げた。）

惜しい会員であつた。私は同郷人、度々お
 日にかゝる機会があり、史料の少ない本近村の

中野地区ながら、何かと話し合つてゐた。いつて
 あつたが一字二語があるというので見にかえり、

二人で歩いたことがあつた。柴田家を辞して私
 達は、帰りのバスの時間があるを幸い、接近い

山から庚申塔を見てやぶがけに

金剛経 一（一）石塔

血金経 一（一）石塔

とある小さな塔を見た。こゝ片田舎のやぶがけ
 にこゝような珍らしい塔があることは意味が

あると思ふ。柴田老人とこゝを歩いた時のことを話
 しながら私達三人はしばしば山村のその昔のこと

に思いをめぐらした。

お二人とも熱心な、そして異色の会員であつた。

青木氏は療養の身ながら古江月見の伝承や古い

資料を追究されて、又程近い石垣原古戦場の

遺跡にキキとやがていた。全快帰郷して、我

々々研修活動に参加をねがひつた。又柴田

老人は高令ながらよく歩かれ、その文工職として

多年の素養経歴から、社寺の建築などについて

教えていたことが多かった。

惜しい同志を失つた。しかし私共はいつまでも

憶えていて、この道をすすむ力と一いと思ふ。